

ミハイル・バフチン著作集 ③

# 文芸学の形式的方法

ミハイル・バフチン著 桑野隆／佐々木寛訳



文芸学の形式的方法——ミハイル・バフチン著作集③

一九八六年十一月一日 初版発行©

定価三四〇〇円

訳者

桑野の  
佐々木 寛隆

発行者 加藤 宣 幸

〒101 東京都千代田区神田神保町一四  
発行所 鯉 新時代社

電話 〇三二九三・四八六四

ISBN 4-7874-3013-0  
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

# 文芸学の形式的方法

**П. Н. Медведев**

**Формальный метод в литературоведении. Критическое  
введение в социологическую поэтику. Л., 1928.**

凡例

## 目次

## 第一部 マルクス主義的文芸学の対象と課題

11

## 第一章 イデオロギー学とその当面の課題 12

- 1、イデオロギー学が当面する根本問題としての特殊性の確定 15 12
- 2、観念論的な「文化の哲学」や実証主義的な人文科学の危機 19
- 3、哲学的世界観と具体的、客観的な歴史的研究との統合 20
- 4、イデオロギーの世界の具体性と物質性 23
- 5、イデオロギー学が当面する二つの問題領域 31
- 6、組織されたイデオロギー的素材の問題 33
- 7、意義と素材、両者の相互関係の問題 35
- 8、イデオロギー的交通の形式とタイプの問題 33
- 9、イデオロギー的環境の概念とその意義 35

## 第二章 文芸学の当面の課題 40

- 1、文学作品の「内容」にみるイデオロギー的環境の反映 40
- 2、ロシアの文芸批評と文学史の三つの基本的な方法論上の誤り 44
- 3、文芸批評と「内容」 47
- 4、「内容」の面からみた文学史の課題 50
- 5、文学作品に反映したイデオロギー的視野と作品の芸術的構造 51
- 6、美学および詩学の問題としての文学の「内容」 57
- 7、隔離の問題 60
- 8、文学史の対象、課題、方法 64
- 9、社会学的詩学の対象、課題、方法 72
- 10、文芸学における「形式的方法」の問題 85

## 第二部 形式的方法の歴史 89

### 第一章 西欧の芸術学における形式主義の潮流 90

- 1、西欧のフォルマリズムとロシアのフォルマリズム 90
- 2、西欧におけるフォルマリズムの発展の歴史的前提 92

## 第二章 ロシアにおける形式的方法 119

- 3、西欧のフォルマリズムの一般イデオロギー的視野 95
- 4、ヨーロッパのフォルマリズムの本流 97
- 5、芸術の構成的課題 98
- 6、描写手段と技術 102
- 7、形式のイデオロギー的深化 104
- 8、可視性の問題 108
- 9、「人名ぬきの芸術史」 110
- 10、詩学の形式的潮流 115
- 1、ロシア・フォルマリズムの初期の刊行物 119
- 2、ロシアにおける形式的方法の発生と発展の歴史的状況 121
- 3、未来主義への定位 126
- 4、ニヒリズムの傾向をもつフォルマリズム 133
- 5、否定的解釈がもたらす詩的構成の歪曲 138
- 6、初期フォルマリズムの仕事の肯定的な面 142
- 7、初期フォルマリズムの総括 144
- 8、フォルマリズムの発展の第二期 148

- 9、形式的方法の現状 155  
 10、フォルマリズム崩壊の原因 158

## 第三部 詩学における形式的方法 163

### 第一章 詩学の対象としての詩的言語 164

- 1、一個の体系としての形式的方法 164  
 2、フォルマリストの教義の基本的要因 167  
 3、特殊な言語体系としての詩的言語 175  
 4、詩的言語と文学作品の構成 182  
 5、詩学と言語学 186  
 6、詩的言語の問題の方法論的分析の総括 188  
 7、陽否陰述的に定義された詩的言語の特性 190  
 8、実用言語の裏返しである詩的言語 194  
 9、学問的抽象化と教条的な否定 200  
 10、文学史における陽否陰述的方法 203  
 11、実生活の言語の問題 204  
 12、フォルマリストのいう実生活の言語 208

## 第二章 詩的構成の成分としての素材と手法

229

- 13、フォルマリストのいう創造 212  
 14、フォルマリズムにみる詩的言語の問題の現状 214  
 15、詩の音の問題 217

- 1、詩的構成の理想的極致である「意味を超えた言葉」 229  
 2、プロットの展開 234  
 3、イデオロギー的に中立のものとして手法を動機づける素材 239  
 4、語りの構成 243  
 5、「内容と形式」の裏返しである「素材と手法」 245  
 6、素材をかたちづくる要素の構成的意義 247  
 7、素材と手法にかんするフォルマリストの理論の批判 252  
 8、トゥイニヤーノフにみる「素材」の第二の理解 260  
 9、詩的構成の問題の正しい提起 263  
 10、社会的評価とその役割 266  
 11、社会的評価と具体的発話 272  
 12、社会的評価と詩的構成 280

## 第三章 芸術的構成の諸要素 285

- 1、ジャンルの問題 285
- 2、現実のなかでのジャンルの二重の定位 289
- 3、作品のテーマの統一 291
- 4、ジャンルと現実 295
- 5、フォルマリストのジャンル理論の批判 299
- 6、主人公の問題 304
- 7、テーマ、筋、プロット 308
- 8、総括 312

## 第四部 文学史における形式的方法 317

### 第一章 意識の外にある与件としての芸術作品 318

- 1、芸術作品はイデオロギー的視野の外にあるとする学説 318
- 2、フォルマリストの知覚理論 327
- 3、知覚理論と歴史 330
- 4、作品を現実の社会的交通から切り放すフォルマリズム 332

5、「外的なもの」と「内的なもの」の弁証法 336

6、芸術の約束性の問題 341

7、時代のイデオロギー的視野の価値的中心が文学の根本テーマ 345

## 第二章 文学の歴史的発展にかんする理論 348

1、文学の歴史的交替にかんするフォルマリストの概念 348

2、文学の歴史的発展の精神生理学的前提 353

3、文学の進化の図式 356

4、進化の現実的な理解を欠くフォルマリストの学説 360

5、フォルマリズムの根幹となる「自動化——感知性」の法則 365

6、文学史におけるイデオロギー的素材 371

7、フォルマリストの概念にみる芸術的知覚の論理性と分析性 374

8、フォルマリストの文学史にみる「歴史的時間」カテゴリーの欠如 375

9、理論の例証としての歴史 377

10、フォルマリズムと文芸批評 380

むすび 383

解説（桑野隆・佐々木寛） 385

## 凡 例

一、本書はバフチンが友人のメドヴェージェフの名前で一九二八年に刊行した『文芸学の形式的方法。社会学的詩学のための批判序説』（П. Н. Медведев, Формальный метод в литературоведении. Критическое введение в социологическую поэтику. Л., 1928）の全訳である。

一、原書の字間あけはすべてゴチック体で表わした。また（ ）は訳者の補足である。

一、原注および訳者による注はすべて見開き左頁の端に入れた。

一、原文中の язык、слово、речь、высказывание（仏語の langue、mot、parole、énoncé）には、それぞれ「言語」「言葉」「ことば」「発話」の訳語をあてた。また смысл и значение（英語の sense と meaning）には「意味」と「意義」をあてた。сюжет（シユジエート）は「プロット」、фабула（ファブラ）は「筋」と訳した。

一、原書のなかでフォルマリストの論文を引用している箇所については、現代思潮社刊『ロシア・フォルマリズム論集』（新谷敬三郎・磯谷孝編訳）、せりか書房刊『ロシア・フォルマリズム文学論集 1、2』（水野忠夫編）その他の邦訳を参考にさせていただいた。

一、翻訳は桑野隆と佐々木寛が半分ずつ担当し、相互に訳文を調整した。

## 第一部

### マルクス主義的文芸学の対象と課題

## 第一章 イデオロギー学とその当面の課題

### 1、イデオロギー学が当面する根本問題としての特殊性の確定

イデオロギー学とは、人間のイデオロギー的創造の全領域を、単一の解釈原理と研究方法にもとづいてとらえる広汎な学問であり、文芸学もここにふくまれる。

このイデオロギー学の基礎は、マルクス主義によつて堅固にきざかれている。マルクス主義は、イデオロギー的上部構造がいかなるものであるかを一般的に定義づけると同時に、上部構造が社会生活という統一体の中ではたす機能、上部構造が経済的土台にたいしてもつ関係、さらにある程度は両者の相互関係をも、一般的に定義づけている。しかし、イデオロギー的創造の個々の分野——学問、芸術、道徳、宗教——の特殊性、独自性の詳細な研究となると、目下のところ手がつけられただけである。

上部構造およびこれが土台にたいしてもつ関係の一般理論と、それぞれの独自のイデオロギー現象の具体的研究とのあいだには、一種の裂け目ともいうべき、曖昧模糊とした領域が存在する。研究者は、各自の責任においてそこをどうにか通り抜けてゆく。あるいはしばしば、むずかしいこと、不明なことの一切に眼をふさいで、あつさりとその跳びこえてしまう。その結果、研究している事象——たとえば芸術作品——のもつ特殊性がないがしろにされたり、あるいは逆に、この特殊性を考慮した「内在的な」ものではあるが、社会学とはまったく無縁な分析に、経済的土台を無理やり合わせるといった事態をまねいている。

つまり、イデオロギー的創造の各分野での素材、形式、目的がもつ特性をあつかう社会学的な理論が、うちたてられていないのである。

イデオロギー的創造の各分野には、固有の言語と、その言語に特有の形式や手法がそなわっており、そこには、単一の客観的現実をイデオロギー的に屈折させる独自の法則がある。それらの相違を均したり、種々のイデオロギーの言語が存在することを軽視する立場は、マルクス主義にもっとも縁遠いものである。

むしろ、芸術、学問、道徳、宗教の特殊性を重視するあまり、それらのイデオロギー的統一性——つまり、一個の共通の土台の上にあり、単一の社会的・経済的法則につらぬかれた上部構造で

あること——をおおい隠すようなことがあつてはならない。しかし、この特殊性が、社会的・経済的法則の一般公式のためにかき消されてはならない。

単一の社会学的方法をイデオロギー的創造の所与の分野の特性に適用した場合に、それがいかに特殊化するかといったことが、マルクス主義そのものにもとづいて考察されなければならない。そうすることによって、この方法はイデオロギー的構造の細部を余すところなくとらえることが可能になるのである。

だがそのためには、まず第一に、イデオロギーの諸系列の特徴、独自性そのものを理解し、定義づけなければならない。

むろん、マルクス主義はこうした定義を、観念論の「文化の哲学」や実証主義の「……学」（芸術学、学問論、宗教学）から借りてくるわけにはいかない。そのような借りものの定義にたいしては、とってつけたように土台を合わせざるをえなくなるであろう。そうではなくて、これらの定義こそが、土台からみちびきだされなければならないのである。

西欧の学問でつくりあげられたこの種の定義は、きまって、故意に非社会学である。すなわち、それらの定義は、（主として生物学にもとづいて）自然主義的に解釈されていたり、あるいは平板に理解された経験のうちに実証主義的に分散させられて、無意味なディテールの荒野に残され

ている。あるいはまた、観念論的あらゆる経験から切り放されて、「純粹な意味」、「価値」、「先験的形式」等によってかたちづけられた自己充足的な王国に閉じこもっている。そのため、それらの定義は、具体的でつねに物質的、歴史的なイデオロギー現象にたいして、まったく無力である。

西欧の学問が研究し明らかにした膨大な事実資料は、もちろんマルクス主義も利用できるし、またそうすべきである（むしろ批判的にだが）。だが研究の原則や手続きは、具体的な方法論の一部もふくめて、とうてい受け入れられない（草稿をあつかう方法論——古文書学、テキストの文献学的な分析などは例外である）。

## 2、観念論的な「文化の哲学」や実証主義的な人文科学の危機

今日では西欧の学問や哲学のなかにさえも、現実から観念論的に遊離することにたいする強い不満がみられるだけでなく、総合化する能力をまったく欠いた無意味な実証主義や自然主義にたいしても、不満が強まっている。とくに目立つのは、世界観にもとづく広汎な総合を、イデオロギー現